



Dialogue

Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2013年9月14日

献学60周年記念事業ギャラリーレクチャー

ICUの歴史とキャンパスの考古学

ICU名誉教授 J.エドワード・キダー



献学60周年記念事業
国際基督教大学





2013年9月14日、ICU献学60周年記念事業の一環として、本学名誉教授J.エドワード・キダー氏を迎え、湯浅八郎記念館にてギャラリーレクチャーを開催した。久方ぶりの来日となったキダー教授の講演は、ICUの歴史についてのみならず、かつてこの土地に住んでいた縄文人の暮らしや文化にも及ぶものとなった。

教授は1956年から1993年まで、30年以上の長きにわたってICUで教鞭を執られ、その草創期にあって今日の大学の発展のために尽力された。教養学部長、学務副学長をはじめとする数多くの役職を歴任、また湯浅八郎記念館初代館長や考古学研究センター長も務めた。こうした任務のかたわら、膨大な数の遺跡発掘調査もおこなっている。現在ICUが建つこの土地の歴史に関する教授の造詣の深さは、こうした経歴によるものである。

レクチャーでは、在職当時の同僚や学生たちの写真のほか、手がけた発掘調査の模様を撮影したスライドが映され、ICUの歴史に対するキダー教授の個人的な思いが伝わる講義となった。

1. ICU献学

キダー教授のレクチャーは、大学献学直前の時代説明から始まった。





現在ICUが建つ三鷹の土地は、かつて中島飛行機三鷹研究所の所有地であった。同社の武蔵製作所では、高速で高度飛行が可能な「鍾馗」（キ44）と呼ばれる機銃4門の二式単座戦闘機が製造されていた。

1956年に撮影されたキャンパスの航空写真を見せながら、来日した時には研究所の建物の多くがまだ残っていた、と教授は語った。1962年までにはそのほとんどが撤去され、学生寮や教会堂などを含むキャンパスの大部分が出来あがっている。当時、若手職員の住宅として使われていた「イーストグローブ」と呼ばれる今は無き建物のスライドも映し出された。それらの古い写真に見覚えがある聴衆からは当時を懐かしむ声が聞かれた。

キダー教授は、終戦当時の様子に触れながら、どのような経緯でこの三鷹の地が大学建設予定地に決まったかを説明した。教授によれば、マリアナ諸島から飛び立ったB-29爆撃機の編隊に与えられた最優先任務は、「中島飛行機武蔵製作所への攻撃」だったという。日本の戦闘機に搭載するエンジンのうち、約40%が武蔵製作所で生産されていたためである。ここは「ターゲット357」として知られた、戦略上重要な攻撃目標であった。その後繰り返された空爆作戦では、8回の出撃で計828もの爆撃機が破壊を試みたが、武蔵製作所は終戦の時まで消失せずに残った。

「これは、ある意味では幸運なことだったに違いない」とキダー教授は言う。ICUが大学の建設候補地を探していた時、空爆で焼け落ちた建物に囲まれた場所だったならば、ここを選ばなかったのではないかと。

最終的に飛行機会社の跡地が選ばれた理由を、教授はこう語った。「放棄され、入手しやすかったといった類いの理由があったのかもしれない。だがなにより、のちに大学の本館となるこの1棟の素晴らしい建物、無傷で誰の手にもわたっておらず、問題なく使用できる、そして学校を開くのに十分な大きさの建物があった、ということなのだ」

2. ICU草創期

ICUはその草創期に、多くの革新的なプログラムを導入した。当初、こうした方針は文部省との間に軋轢を生んだが、のちに国内のほかの大学でも採用されるようになった。キダー教授に言わせれば、もっと評価されてしかるべき取り組みである。

例えば、日本初となった全館開架式の図書館がある。当時の日本の図書館は概して書庫が閲覧者に公開されていない閉架式で、「司書が我が物顔で管理していて、買収もしない限り欲しい本を手に入れるのが至難」であった。開架式の図書館では「書架の間を歩き回り、拾い読みをして、欲しい本を自分で選ぶことができた」と教授は語る。





また、学生会館（ディッフェンドルファー記念館）は日本のみならず世界の大学に先駆けた施設だった。教授は、自身の母校にさえ学生会館はなかったと振り返る。「学業とはまったく関係のない施設を学内に設けるという発想が目新しく、ありとあらゆる学生活動の場となった」

学生寮もまた、議論を呼ぶこととなった。男女共学の大学として、構内に男子寮と女子寮の両方を作ったところ、文部省から「同じキャンパスに男子寮と女子寮があってはならない」という通達を受けたのである。しかし、学生寮の建設はすばらしい計画のひとつだった、とキダー教授は語る。寮生たちの結束は固く、卒業後も多くの学生が寮への強い所属意識を持ちつづけたという。

さらに画期的だったこととして、諸費用をすべて学費に含めるというシステムがあげられる。他大学は授業料に加え、建築費や施設費その他の諸費用を徴収するが、ICUでは比較的高額ではあるものの、献学当初より授業料ですべてをまかなっている。

ICUが直面した最大の課題は、4月から始まる日本の学年度と、多くが秋から始まる諸外国の学年度をいかに調整するかということだった。これは、国際化というICUの重要な使命を実現する上での障壁となった。問題を解決するためにICUは3学期制を採用し、秋学期に留学生を受け入れるという独自のシステムを実施している。もうひとつ国際化の妨げとなったのは、学位を取得するために4年間、大学に在籍する必要があることだった。これでは海外の大学での交換留学プログラムに参加することは、事実上不可能になる。だがこの問題も、留学中の単位の修得基準を明文化するなどの工夫で解決した。

そのほかにも、登録科目を変更できる期間を設ける制度や、文部省が定める12年間の在籍期間の上限を8年間に短縮すること、3学期連続でD評価を受けた学生を除籍処分のできる仕組みなど、新たな施策を導入している。

教授の話は続く。「全盛期には、入試倍率は20倍近かったこともある。選抜はとても厳しく、学生たちは非常に優秀だった。大学は紆余曲折を経ながら、文部省の規制を打開していった。時には、ぎりぎりのところで折り合いをつけることを強いられることもあった。だが時代は流れ、世の中は大きく変わった。今日では問題にならないことも、当時は大変な苦勞だった」

3. 大学周辺の考古学史

次にキダー教授は、ICU周辺が考古学上いかに重要であるかについて触れながら、講





義の本題に入っていった。地形の変化が起こった氷河時代に日本と大陸が地続きになり、マンモスやオオツノシカといった大型動物類が日本に渡ってきた。さらに時代はくんだり、縄文時代は現代よりも気候が温暖で「日本の歴史のなかでも素晴らしく豊かな時代だった」と教授は解説する。スライドを見せながら、教授は日本で自身が手がけた発掘調査の成果を説明した。

ICUの敷地は「野川流域に出土している50もの遺跡のうちのひとつで、縄文時代前期から紀元前3000年から4000年頃の中期にかけて、きわめて快適な場所であったことは間違いない。崖線に沿って多摩川に至る地域からは、さらに50ほどの遺跡が発見されるのではないか」と語る。

日本の河川は国土交通省によって管理されている。キダー教授らの「最初の大発見」は、その一級河川・野川沿いの段丘で起こった。のちに野川遺跡と命名されることになる、通称「Loc.28」である。ゴルフ場整備と野川の河川改修計画にともなっておこなわれた発掘調査で、キダー教授ら考古学者と学生たちは縄文遺跡の地層を掘り進め、その下の旧石器時代の文化層にまでたどり着いた。この調査が非常に重要な意味を持ったのは、初めて「旧石器時代の最上層から最下層まで、遡ること約28,000年の石器類を全層位的に掘り当てた」ためである。

教授は、出土品の一部を年代順に並べたスライドを映しながら説明を続けた。写真の下の方にあるのは、粗削りの打製石斧や削器・搔器など古い石器で、上にいくほど





新しくなり、より小型で鋭くバランスの取れた形に変化していく様子が見てとれる。「上部の石器は石鏃や石槍として使われていたことが推測される」と教授は解説する。

教授らは細石器と呼ばれる小さな石刃も数多く発掘している。木製の柄にはめ込んで草木などを刈るのに使用した道具で、材料の黒曜石の大部分は、現在の長野県の山地で採れたものと考えられている。最高の石材を手に入れるためにそれほど遠くまで行っていたという事実は、当時の人々の文化を知るための重要な考古学上の手がかりとなる、と教授は説明する。

1957年までにICUはめざましいペースで発展していった。その頃、キダー教授は考古学のコースを教えることを大学に申し出たという。当初は構内で発掘調査をする授業だったが、教授は「こうした事柄に関して法律がどうなっているかについて、ひどく無知だった」と当時を振り返る。大学の顧問弁護士に確認の上、何枚かの書類にサインをしてすっかり安心していたところ、3、4年経った頃になって、文化庁の文化財部から「神聖なる日本の国土」を違法に掘っているという内容の書簡を受け取った。幸い、教授がかつてフルブライト奨学生として京都大学大学院に留学していたときの同窓生が文化庁に掛け合い、事なきを得た。同窓生の説明では、役所側は教授が発掘作業をしていることは承知していたが、日本の法律では国内で外国人が考古学の発掘調査をおこなうことを禁じており、教授に代わって書類にサインする日本人を立てれば、このまま調査を続けることができるということだった。教授曰く「誰もがこんなのは馬鹿げた規則だと分かっていた」ので、最終的には文化庁も、教授自らの名前で調査することを許可するようになった。

1975年にICU考古学研究センターが設立された後、キダー教授らは15地点もの発掘調査を終えた。教授は自身が「日本で発掘活動を許されている唯一の外国人」として知られるようになっていた、と話す。

発掘調査の多くは小金井市でおこなわれた。当時、この地域への企業の移転が相次いでおり、用地開発に着手する前の発掘調査が法律上、義務づけられていたため、キダー教授らのグループは引く手あまたの状態で、多い時には都内のさまざまな教育機関から150人もの学生を動員して現場を率いたこともあった。

教授は、思い出に残る出土品について懐かしそうに語った。キダー夫人が崖線を下った斜面を歩いていて発見した小さな土偶をはじめ、ICU構内では当時一例だけ見つかった数石住居址など、さまざまなものが紹介された。



もうひとつの非常に興味をそそられる遺跡も、偶然に見つかったという。近隣のゴルフ場で樹を移しかえていた庭師たちが、何かを見つけたと言ってきたのである。1973年に始まったその発掘プロジェクトは2年間続けられ、1974年に円形住居址を発見した。住居の周りを囲むように二重の排水溝があり、家屋を支える柱穴、炉址など多くの遺構が出土した。だが、もっとも興味深かったのが、入口付近の床下に埋められた土器である。それは幼児を埋葬したか胎盤を保管していたと思われる埋甕で、それまで見たことのない大発見だった。

ICUのキャンパスは貴重な考古遺物の宝庫であった。あらゆる時代の石鏃や石斧、石錘、土器、魚網用の道具などが次々と見つかっている。その中には、独特の磨き方や仕上げの様子から、日本の外から持ち込まれたのではないかとキダー教授が推測する耳飾りも含まれる。

4. おわりに

キダー教授は穏やかで暖かく、ジョークを交えながら語りかけ、終始、会場は笑いに包まれていた。講義というよりはむしろ、気のおけない友人同士の語らいのようであった。最後に、教授は1957年当時の本館の写真を見せた。建物は改修前で、周りの木々もまだ今日のように生い茂っておらず、一見すると本館とは分らない。しかし教授は、建物の本質は変わっていないと言う。

「ともかく、素晴らしい建物だった。いや、今もそうだ。当時、必要なものはすべてそこに揃っていた。図書館は丸ごと2階に入っており、1階には理学科の設備があった。片側はオフィスで、反対側に教室が並んでいた。私にとって、この本館が日本での心の拠り所、ICUの中心だ。歴代の卒業生たちにとっても、一番思い出に残っているのはこの建物だろう。ぜひともICUの象徴にしていってほしいと思う」

